

遠隔教育システムによる不登校児童の状況改善

清水 雅子・赤井 悟

Improving the Situation of a Truant Through a Distance Education System

SHIMIZU Masako and AKAI Satoru

Abstract: This study reports on the effective use of a distance education system to improve the situation of a child who had been truant from school. In the second semester of the 3rd grade, student Y became truant from the second semester, and in the third semester, he was not able to attend school at all. Y's truancy gradually decreased, and in November he was able to attend school. However, this was not only due to the use of the distance education system, but also because of the improved relationships between teachers and children, and between the children, which were established through effective classroom management.

Key Words: truancy, distance education system (Zoom), ICT, tablet, classroom management

要旨：本研究では、遠隔教育システムの効果的な使用により、不登校児童の状況が改善した実践を報告する。児童 Y は 3 年生の 2 学期から不登校状態になり、3 年生の 3 学期には全く学校に登校できない状態になっていた。4 年生 2 学期の運動会と校外学習に際し、学級と不登校児童の家庭を遠隔教育システムで結び活動を行ったところ、Y の不登校状態は徐々に改善し、11 月には登校できるようになった。ただし、これは単に遠隔教育システムを用いたことのみによる成果ではなく、その裏には優れた学級経営による教員と児童間、児童と児童間の関係が作られていたからだと推察される。

キーワード：不登校、遠隔教育システム (Zoom)、ICT、タブレット、学級経営

1. はじめに

文部科学省は「不登校」を、年度間に 30 日以上登校しなかった児童生徒のうち「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者（ただし、「病気」や「経済的理由」、「新型コロナウイルスの感染回避」による者を除く。）」と定義している。（文部科学省 2021）不登校児童生徒は 8 年連続で増加しており、令和 2 年度（2020 年度）では、小学校 63,350 人（全小学生数の 1.0%）、中学校 132,777 人（全中学生数の 4.1%）となっている。

一方、GIGA スクール構想により児童生徒一人一台の ICT 端末所持が実現し、全国の小中学校の ICT 環境は格段に充実した。新型コロナウイルス感染症の拡大により学校を休む児童がさらに増加し、学校や学級の臨時休業が頻発したが、文部科学省は、やむを得ず学校に登校できない児童生徒が ICT 端末を自宅に持ち帰り「登校できなくても学校と自宅等をつなぐ手段を確保し、児童生徒とコミュニケーションを絶やさず、学びを止めないようにする取組が重要である。」とその対応について述べている。（文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課 2021）

小中高等学校の学級経営は、「学級・ホームルームという場において、一人一人の児童生徒の成長発達が円滑か

つ確実に進むように、学校経営の基本方針の下に、学級・ホームルームを単位として展開される様々な教育活動の成果が上がるように諸条件を整備し運営していくこと」(文部科学省 2010)と定義される。学級運営⁽¹⁾の役割について、国立教育政策研究所は、「自己表現力や伝え合う力の育成、日常の問題を解決する力の育成、自己肯定感をはぐくむための体験活動、心の健康と生活習慣の向上に関する指導など」をあげている。(国立教育政策研究所 2002) 一方、学級経営という領域が多種多様な構造を抱えており、理論化や一般化が難しいとの指摘もある。(藤森 2014) これは、学級経営が学級担任と児童生徒が出会ってからかなり長期に亘る営みであることや、非言語コミュニケーションや教育的タクト⁽²⁾(田中 2007)という記録に残しにくい教員の言動が重要な役割を果たすなど、言語化が困難であるという背景がある。

学級経営はそれ自体が目的ではなく、学習指導や生徒指導などのあらゆる教育活動の基盤を作る営みである。しかし、学校に登校していない児童生徒は、自己表現力、自己肯定感など、学級経営で営まれる教育を享受できない。このような中、W 教諭は遠隔教育システムを学校に登校していない児童が学級経営に参画する一つのツールとして用い、家庭の児童と学級をつなぐことを試みた。本研究では、その結果不登校児童 Y の状況が大きく改善した実践について、考察を加えて報告する。

2. 遠隔教育システムと学級経営

2.1. 遠隔教育システム

W 教諭の勤務する H 小学校で、遠隔教育システムが運用できるようになったのは 2021 年(令和 3 年)4 月であった。これにより、児童は ICT 端末(タブレット)を自宅等に持ち帰れるようになり、担任教員による同時双方向型の授業や、学習課題の送受信が可能になった。

2 学期になり、4 年生担任の W 教諭は、通常の授業や連絡を欠席児童の家庭に配信するため遠隔教育システム(授業は Zoom, 連絡は Teams)を利用することにした。授業での機器の設定を(図 1)に示す。

まず、授業開始の 5 分前に日直児童 2 名が、教室に設置されている PC の遠隔教育システムを起動させる。授業中は、教室 PC、日直児童 2 名のタブレット、複数の欠席児童のタブレットが遠隔教育システムに入っている。教室 PC に接続した書画カメラ(固定)は教室の全児童を撮影する。日直児童 2 名はそれぞれのタブレットカメラ(移動)で W 教諭の指導言や板書、発表している児童などを撮影する。この一場面を(図 2)に示す。同時にこの 2 名の児童は、遠隔教育システムの画像や音声や円滑に流れているかをモニタリングする役割も担う。欠席児童のタブレット上には、教室の全児童、W 教諭の指導言や板書、学級の児童の発言、他の欠席児童の表情などの学級のさまざまな様子が映し出されている。また、必要な時には音声やチャットで発言することができる。この授業は、授業日の 3 時間目または 5 時間目に設定し、必要に応じて延長した。教科は主に算数、国語であった。

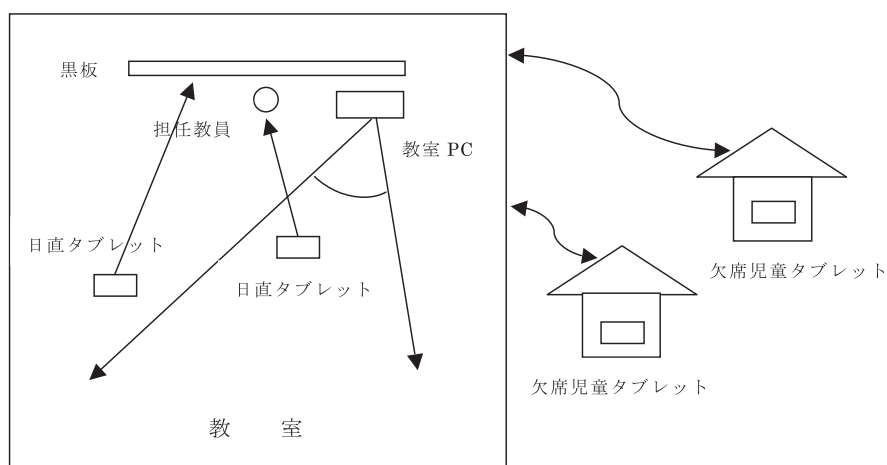


図1 遠隔教育システムの設定



図2 W教諭の板書を撮影する日直児童

2.2. 学級経営

W教諭が担任する4年生の学級は男子17名、女子23名である。その中には、特別支援学級在籍児童が1名、通級指導教室への通室児童が2名いる。男女の仲はよく、休憩時には一緒に外遊びができる。素直で子どもらしい児童が多く、英語活動での会話練習なども恥ずかしがらず隣の児童と会話ができる。また、多くの児童が困っている友だちには声をかけたり助けたりできる。終わりの会では、その日ががんばった児童のことを発表して褒め合っている。

ただしこのような学級は自然にできるのではない。W教諭は、児童主体の教育観⁽³⁾をもち（赤井 2013）、戦略と展望を持ちながら学級経営を行っている。本実践の裏では、優れた学級経営による教員と児童間、児童と児童間の良好な関係があったことを付記する。

3. 実践と結果⁽⁴⁾

3.1. 女子児童Yについて

Yは、休み時間などは男子児童とドッジボールをして遊ぶなど運動が好きであった。しかし、3年生（2020年）の10月頃から欠席が増え、11月中旬から全く登校しなくなった。この日から3年生終了までは一日も登校していない。前担任からは、Yは「学校に行く意味がない。」と一日中動画を見たりゲームをしったりして過ごしていると聞いていた。

W教諭は、4年生でYの担任となった。Yは始業式と翌日は登校したが、3日目給食が始まると登校しなくなった。同じマンションの女子児童にYについて聞いたところ、学校に行かなくなったのは3年生の時、給食中に嘔吐したことを学級で笑われたからとのことだった。これが不登校の原因か否かは不明である。Yの友だちは、前出の児童を含めて女子児童2名だけである。

Yの母親はさっぱりとした性格の印象で、3年生時Yが休み始めた時も、前担任には「そのうち行くでしょう。」と話していた。ところが、家庭での母親は、毎日昼食のおにぎりを用意し、算数などの勉強を教えていた。「そのうち・・・」という発言とは異なり、Yを心配している様子が伺えた。母親から毎日の欠席連絡（保護者から学校への「今日は〇〇のため休みます。」との電話連絡）が辛いとの話があり、その後の欠席連絡は止めていただいた。

3.2. 実践とそれに伴うYの変化

4年生4月からのYの出席状況を（表1）に示す。また、遠隔教育システムによる授業の配信や学級活動へYの参加があった10月以降のYの出欠状況（○は出席、△は早退、×は欠席）を（表2）、（表3）、（表4）、（表5）に示す。表中に特記事項がある場合にはA、Bなどの記号で示し、後に詳述した。

表1 4年生時の欠席日数と特記事項

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
授業日数	15	18	22	14	4	20	21	20	18	14	15	13
出席日数	2	0	0	0	0	0	3	17	14	9	9	1
特記事項	A			B	C							

A：4年生になって5か月ぶりに始業式と翌日は登校したが、給食開始日から登校しなくなった。母親は苦悩しており、Yには毎日電話をかけやってほしいとのことであった。毎日の電話でW教諭は家庭での過ごし方を訊ね、学級の様子を話した。

B：1学期終業式の日、母親に通知表を渡したいと連絡したところ、Yに取りに行かせるとのことだった。放課後登校してきたYに、タブレットとZoomの使い方を説明した。

C：8月下旬から2学期が始まったが、Yが登校することはなかった。

表2 4年生10月(1日～15日)の出欠と特記事項

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
出欠	×	土	日	×	×	×	×	×	土	日	×	×	×	×	×
特記事項												D	E		F

D：Y宅を訪問予定の学校カウンセラーに、W教諭が運動会と遠足に誘っていることを伝え、それを話題にするよう求めた。

E：Yに電話で運動会だけ出てそれ以外の時間は保健室など別室にいていいことを伝えた。

F：10月15日、W教諭がYに運動会の徒競走への参加を呼び掛けると、学級の児童から拍手が起こった。「遠足も一緒に行きたい。」と言う児童の意見にも拍手が起こったので、「遠足も一緒に行きたいって。拍手、聞こえてる？」と言うと、Yからリアクションボタンで「いいね。」と反応があった。

表3 4年生10月(16日～31日)の出欠と特記事項

	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
出欠	○	日	休	×	×	○	×	土	日	×	×	×	×	○	土	日
特記事項	G					H	I						J	K		

G：10月16日は運動会であった。朝から登校し30分間の学年運動会に参加し、他の児童と一緒に授業を受け下校した。

H：10月21日は校外学習であった。朝から登校し、万博記念公園などを見学、昼食後他の児童とクラス遊びし、帰校した。

I：学級の児童から、Yが「行事がある時は学校に行く。」と言っていたと申し出があり、児童から学級でハロウィンイベントをしたいと意見が出た。10月29日のイベントが楽しめるようにと、この日から教室の飾りつけや宝探しゲームのための折り紙のお菓子作りをした。

J：授業後のZoomで、学級の児童がYをハロウィンイベントに誘うと、「行く。」とのことであった。その後W教諭はYに電話をかけ、3時間目の音楽の授業前に迎えに行くことと約束した。また、10月から取り組んでいるオペレッタの台本から、自分が言いたいセリフを決めておいてほしいと話した。前年度のオペレッタは不登校になったため出演できなかった。

K：ハロウィンイベント当日、Yは朝から登校し、長休時はドッジボールをして他の児童と遊んだ。専科教員が担当する音楽の授業にも出席した。オペレッタで自分が言いたいセリフを決めていたので、他の児童と同様、希望が通りセリフを言うことになった。オペレッタには意欲的で、歌のソロや効果音などを決める際も、Zoomの

チャットを使って参加していた。4 時間目終了後帰る予定だったが 6 時間目までいると言うので、W 教諭が給食は保健室で食べてもいいと伝えたと安堵して保健室で給食を食べ、その後午後の授業も受けた。

表 4 4 年生 11 月（1 日～15 日）の出欠と特記事項

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
出 欠	○	○	祝	×	×	土	日	×	○	○	△	△	土	日	○
特記事項	L	M		N							O				

L：「4 時間授業だから行く。」と言っていた通り登校、給食は保健室で食べた。

M：下校時、翌日は男子児童と遊ぶ約束をしている、と嬉しそうに話していた。

N：風邪をひいて欠席すると母親から連絡があった。これが再び不登校のきっかけにならないかと心配したが、11 月 9 日から登校することができた。

O：11 月 11 日、12 日は、養護教諭が修学旅行引率のため不在で保健室が閉室であったため 2 時間目終了時に下校した。

表 5 4 年生 11 月（16 日～30 日）の出欠と特記事項

	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
出 欠	○	○	△	○	土	日	○	祝	○	○	○	土	日	○	○
特記事項		P	Q												

P：終わりの会で、毎日誰かが「Y と 6 時間目まで勉強ができて嬉しかった。」と発言するので、W 教諭が「煩わしかったら止めるよ。」と言うと、「大丈夫。」と笑っていた。

Q：保護者からの連絡帳に、「本人が申し出れば 2 時間目で下校させてほしい。」とあった。休み時間に自宅まで送ったが、続く 3 時間目には遠隔教育システムに入り授業を受けた。

4. 考 察

2 学期当初、当学級には新型コロナウイルスの感染回避のために欠席している児童がいた。また、学校に来ることや他の児童に会うことに抵抗を感じる不登校児童もいたため、W 教諭は遠隔教育システムによる授業配信であれば、両者を学校生活に参加させられると考えた。そのための機器設定が（図 1）である。W 教諭は、単に固定カメラで授業を配信するのではなく、固定カメラと日直児童による移動カメラを配置した。日直児童は常に配信の状況をモニタリングしており、W 教諭は配信状況や動画のレイアウトを意識することなく授業を進めることができた。授業という教員と児童の動的な営みの配信に対し、タブレットの機動性を用いたことは、遠隔教育システムの使用をより効果的にした。また、日直児童はタブレットカメラで自分が重要と考える場所を撮影できるなど、自分が授業を中継しているという使命感をもった。授業に参加している児童より授業に集中していたと考えられる。日直は輪番であるため、学級の全員がこれを体験した点も効果的であったと考える。

特記事項 B にあるように、W 教諭が Y に Zoom の使い方を説明したことが Y の学習参加のきっかけになった。特記事項 F では、運動会や遠足への学級児童の誘いに対して Y は「いいね。」と反応した。学級児童の誘いは W 教諭が仕組んだものではなく、学級に自然に生じたものである。学級の児童が Y を動かした瞬間であったと考える。

特記事項 I の、「行事がある時は・・・」は学級の児童からの情報提供である。この情報から 10 月 29 日に、ハロウィンイベントを実施することになった。特記事項 J にあるように、児童と W 教諭は、それぞれ Zoom と電話で Y をイベントに誘った。10 月 29 日、当初 Y は 3 時間目から登校の予定であったが、当日は母親と共に朝から登校した。Y は学級に自分の居場所を得たのだと考える。この日を境に Y は連続して登校するようになった。

ハロウィンイベントは当初から計画されていたものではない。児童からの情報提供により、W教諭が臨時に設けたイベントである。W教諭のYの状況を察した機敏な対応であり、W教諭の児童主体の教育観が表出したものであった。

特記事項Mでは、11月3日(祝)Yは男子児童複数と遊ぶ約束をしており、活発なYが戻ってきたと感じる。

特記事項Pの「Yと6時間目まで・・・」は、毎日誰かが発言していた。Yは毎日これを聞いて自分が学級の一員であることを確認していたようで、Yの連続した登校を支えていたと思われる。

特記事項F, I, K, PのYに対する学級児童の発言や働きかけは、学級経営による担任と児童、児童と児童の良好な関係ができ上がっていることを示す。学級経営とは教育活動の成果が上がるよう諸条件を整備することである。この実践の背後には、日常の問題を解決する力の育成、自己肯定感をはぐくむ体験活動など、W教諭の学級経営による諸条件の整備があることを見逃してはならない。

不登校児童に対して、担任教員は家庭訪問や電話での接触はできる。一方、本実践のような遠隔教育システムによる授業配信や同時双方向授業では、学級児童と不登校児童との接触が可能になる。ここで遠隔教育システムは、「電話以上対面以下」の状態にとどまらず、学級の児童と不登校児童の交流の場となった。遠隔教育システムを通して伝わる学級の児童の言動は、予想以上に不登校児童に影響を与える。本実践ではこれが具体的に示された。

5. おわりに

W教諭や学級児童のYへの働きかけやその結果は、個性の一回性の事例である。当学級には、Yとは全く事由の異なる不登校児童があと2名いる。W教諭はあらゆる可能性を探りながらこの2名にもYと並行して指導を行っている。

学校は児童にとって、人間関係の構築を学ぶ場である。学級は、学校という社会の中の温かな家族のようでありたい。担任は親であり、学級の児童は兄弟姉妹である。家族は時にはもめることがあっても、互いに信頼しているため有事時には助け合える。学級の児童も行事やトラブル時には知恵と力を合わせ、助け合い、立ち向かえるようにありたい。

結果的に、当学級の40人全員が登校したことは、1年間に一度もなかった。しかし学級の児童にとっては、不登校児童が登校できるようになることは大きな願いである。そのため、運動会、遠足、ハロウィンイベントと、Yと一緒に活動することをたいへん喜んだ。学級がまとまり、Yの登校などの念願がかなっていくことを、児童は「私たちの学級はすごい。」と表現している。

注

- (1) 「学級運営」とは基本的には「学級経営」と同じ概念であるが、当該文献では学級担任でない教員も協力するという意味でこの用語を用いている。
- (2) 「教育的タクト」とは、計画された授業過程のなかで子どもたちの思いがけない反応や不測のできごとに直面し、教員が教育的に適切な臨機応変の対応を行うことをいう。
- (3) 教職経験を重ねたある時期、教員に自分主体の教育観(自分の考える教育を行おう)から児童生徒主体の教育観(児童生徒が必要とする教育を行おう)に教育観の転換が見られることがある。「児童(生徒)主体の教育観」は、優秀な教員に顕著にみられる教育観である。
- (4) 不登校児童の指導は、計画された一つの実践が成果を生むという性質のものではない。本来の研究論文は、方法(実践)と結果は分けて述べるものであるが、本実践は小さな実践が小さな成果を生み、その成果を踏まえた小さな実践が次の小さな成果を生む。その連なりが不登校の改善となるものであった。そのため「実践と結果」という章を立て、あえて実践と結果を並行して述べた。

引用文献, 参考文献

- 文部科学省(2021) 令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要 pp.14-19
- 文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課(2021) やむを得ず学校に登校できない児童生徒へのICTを活用した学習指導について 事務連絡(令和3年8月27日)

文部科学省（2010）生徒指導提要 pp.138-139 教育図書

藤森宏明（2014）教職大学院制度がもたらした教育・研究に対するインパクト－とくに学級経営領域に着目して－ 北海道
教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要第4巻 pp.27-37

国立教育政策研究所（2002）学級運営の在り方についての調査研究（報告書） p.11

田中耕治（2007）授業における技術化と芸術化の問題 田中耕治（編）よくわかる授業論 p.19 ミネルヴァ書房

赤井 悟（2013）教師力の形成と成長についての調査研究－平成23年度奈良県優秀教職員へのヒアリングから－ 奈良教育
大学教育実践開発研究センター研究紀要第22巻 pp.199-204